

ホットワーク 月山

発行：山形県立自然博物館(冬期： 75-2040 Fax 75-2301) 2008年 1～2月

2/22、月山志津温泉主催・六十里越街道雪まつり「雪旅籠の灯り」イベントが、志津地区でスタートしスケッチクラブの仲間も、大勢で、このイベントに参加し、雪旅籠の作品群を感動しながら鑑賞しました。

多くの方の、情熱的、且つ、遊雪の心豊かに仕上げてくれた作品は、温かな点灯によって、志津400年の歴史が、ロマンあふれる無限の夢に広がろうとしています。

今号の内容

- p1 雪旅籠の灯り
- p2 ブナの森情報
- p3 志津400年とは
- p4 『スケッチクラブ』例会
- p5 志津の雪 パート1
- p6 志津の雪 パート2



灯りの点灯前の雪旅籠



灯りが点灯した雪旅籠



2008年1~2月の『月山ブナの森情報』

今年の積雪は平年並み

去年の志津地区の最高積雪深は460cm。随分と少なかったような印象があるが、里が少なかったということと、3月になってから降り続き、3/20に最高積雪深を記録し、平年と比べて、遅い雪だったからだと思います。

現時点で、昨年と比べると、今年の方がかなり多く、既に480cm(2/18)を記録しているので、最高積雪深は、おそらく5mを超えると思っています。(P5とP6参照)



ヤドリギの実が多い

弓張平地区はホザキヤドリギも含めて、例年よりヤドリギの実は少ない印象ですが、博物館周辺のヤドリギの実は、これまでになく多く感じられます。積雪もままあなので、至る所で、目線で宝石のような実が、赤も黄色も見られます。

これからの楽しみは、ウサギがヤドリギの実を食べると、繋がったフンが見られることです。是非、探してみてください。

メープルシロップが楽しめます

今までメープルシロップが楽しめるのは3月になってから、と思っていたのですが、2/11に試してみたらポタリポタリとでてきたのです。そして、2/22には、温度が高かったからか、前回よりも更に量が多く、甘味も濃かったように感じました。

メープルシロップが採れる時期は、寒暖の差が大きくなる2月~3月が最も多く、甘味も濃いということですが、月山山麓は豪雪地帯なので、もう少し遅いと決めつけていたので、正直、今回は驚き、そして素朴な疑問が湧きました。

一つは、樹液が甘くなるのは何故なのか、ということ。もう一つは2/26に3箇所を試したのに全く反応がなかったのは何故かということ。

ついでに言えば、濃縮せずに、樹液をストレートに口にして、人間は甘味を感じることができるものだろうか。

直径が30cm位の成木からメープルシロップが40~80%も採れるらしいが、それだけの量を何故に木は作るのだろうか。これから機会あるごとに体験を楽しみ、様々な疑問を参加者と一緒に考えたいと思います。

皆さん、今がチャンスですよ。

3/28年:イワナ



2008/1/17
T. Takachi

志津村 400 年とは

志津の看板より

1611年に最上義光が志津に口留番所を設け、その管理のために大井沢村、月山沢村、砂子関村から14人を常駐させたことから志津村が成立しました

博物館の入口・ネイチャーセンターが建つ玄海は本道寺と大井沢大日寺で得度した行人たちが修行

した場所で、海号を受けた行人として、園内だけでも、玄海の外に、北辰海、周海や大門海、行全海などが地名や石碑として確認できますが、他にも埋もれている石碑があるとのこと。

行人たちが、一木戸、装束場を経て湯殿山奥の院に日参する修行を千日も続けた、修験道の拠点、内陸側ではここ玄海で、庄内側の注連寺及び大日坊の修験場が仙人沢といわれます。

出羽三山信仰の歴史は、平安時代から始まり、志津には本道寺と大日寺の賄い小屋及び、修行の世話をする休み茶屋があって、修行を物心から支えた重要な基地でした。

つまり、何も無かった所に、いきなり山形城主・最上義光が番所を作ったわけではなく、村としての基礎は、湯殿山信仰を支えた本道寺と大日寺とのつながりによって、随分と昔からできていたと思います。

出羽三山信仰の歴史からみても、更に六十里越街道の歴史からみても、400年という歴史は短いように思うわけですが、それはあくまで、官僚組織の中に組み込まれたのが1611年ということだと思います。

このことを理解した上で、しかしながら、一見極めて厳しい自然環境の下で、魅力的な集落として400年も続き、現在も町をリードする「雪旅籠の灯り」などの新しいイベントを成功させているエネルギーはすごいと思います。このエネルギーの源泉を、志津400年を振り返りながら、探っていきたいと思います。

(横山記)

雪旅籠の灯り

三山行者が訪れた昔の志津の町並みを雪で再現した志津の雪まつりです



地元青年部と芸工大の先生と学生、NPO 法人エコプロらが中心になって再現された巨大な雪の芸術作品

セレモニー会場も雪で作られ素晴らしい挨拶が続きました



出羽三山信仰の宿場町として栄えた志津村の雰囲気が感じられました



ろっそくの灯りが加わると一段と温かく感じられました



『スケッチクラブ』例会報告

長岡氏

セツケイカワゲラの季節になった。表雪は雪が解け、昨夜の寒さで中雪は0度の締まり雪で、温度差の広がる季節でもある。「どどっ」と、ブナに付いていた雪の塊が落ちた。春のきざしだ。

今日はスケッチクラブの新年会を兼ねた例会である。かつての会員も参加し総勢26名。「気心」が、自然の中での深い結びつきになっている。

難しい世の中で、個々人の生き方も温故知新、21世紀に耐えられる生き方をしている。自然やクラブ員と触れ合うなかで、どこかでプラスになっているのだろうか。何と云っても、個々人の独力以外にはないと思っているが。



大場氏

雪深い月山の麓、志津地区。遊雪を目的に「雪旅籠」というイベントが展開された。今回で3回目という。月山信仰で、全国から信者が訪れた時は、ここ志津の旅籠が大いに賑わった。

「雪旅籠」は往時をしのいで、地元青年部と芸工大の先生と学生たちが中心になって再現された巨大な雪の芸術作品ともいえよう。夕方になって、その作品に灯が点灯されると、そこには幽玄の世界が広がった。ぼくはしばし黄泉の世界をさまよったような感覚に襲われた。



秋山氏

「雪旅籠のあかり」セレモニーに参加し、久しぶりに式典らしきものに触れたことと、寒さとの緊張で気持ちひきしまりました。

旅籠の灯りのろうそくの温かさ、数十年前の集落の様子、生活用品を目にし、自分の子供の頃を思い描くことができました。

また、新しい灯り(青色発光ダイオード)を目にして、やはりろうそくの灯りの温かさがいいな、とことさらに思えたことで、日本人の心の中には自然の灯りが合っていると感じ、残していきたいものと思いました。

来年には(スケッチクラブとして)雪旅籠作りにも参加するという意気込みに楽しみにしています。



志津地区の積雪について

下図の元データは西川町建設課出所で、月山志津温泉「清水屋旅館」の敷地内で毎日測っているものです。

「今年は多い」「今年は去年より少ない」は、冬の日常会話ですが、これらは至って感覚的で、その人の感性がもろにでるわけですが、統計的に整理すると以下のようなようになります。

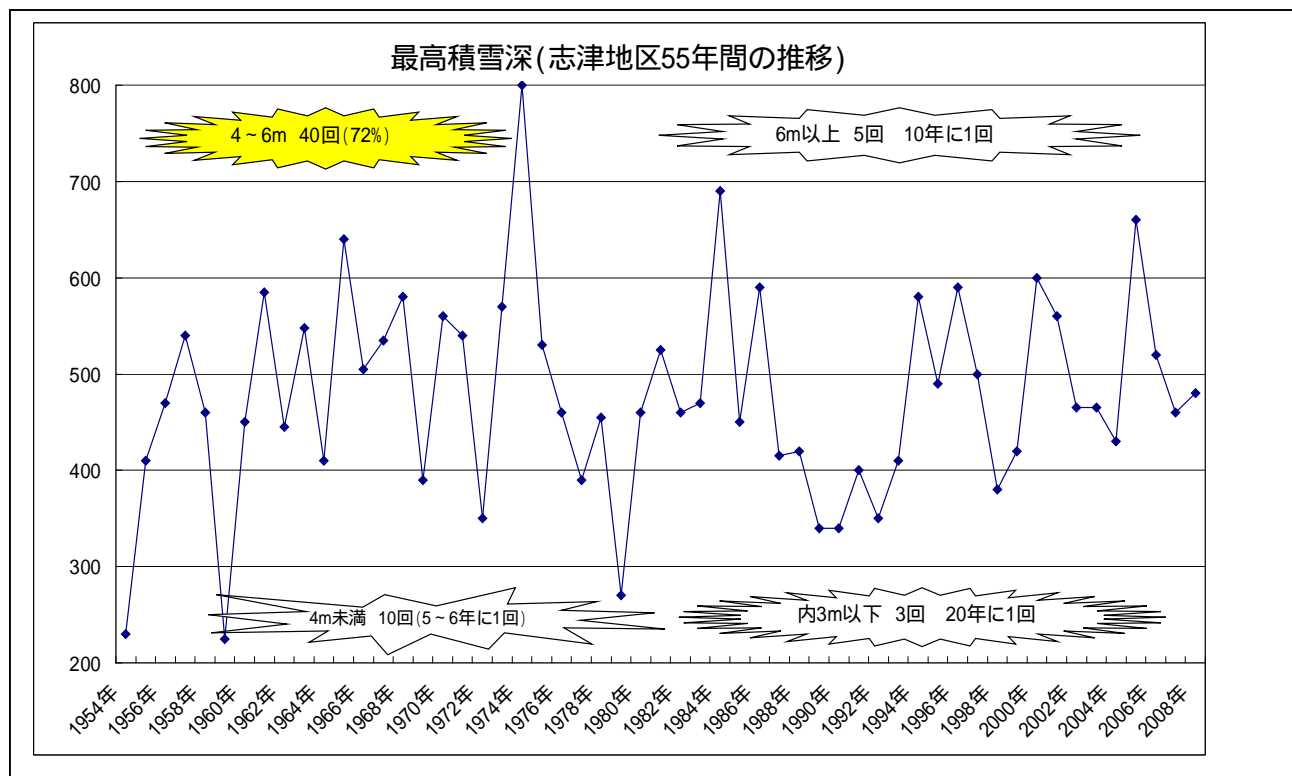
志津地区の平年並みの積雪深は概ね 5m と言われますが、4m 未満が 55 年間で 10 回もあります。5~6 年に 1 回は「今年は少ない」という年があるということになります。それに対して 6m 以上になる年は 55 年間で 5 回なので「今年は例年になく多い」という年は以前から 10 年に 1 回あるということです。*最近はむしろ安定して雪が多いと言えます。



今年も含めて、5m 前後というのが 55 年間で 40 回もある、毎年の現象に、私たちは、その日その時の微妙な感覚で、敏感に、あるいは微妙に反応しているということではないでしょうか。

さて、積雪深が 5m という意味を来園者に伝えることがとても難しいと感じています。弓張平公園内を案内していて、その都度、積雪を測り、子供達に「ここはどの位の積雪か?」と聞くと、8m とか 10m とか平気でいうわけです。雪の立場からいうなら、1m も雪が積もるといことは大変なことであって、それが安易に 10m とか言われると、多少がっかりもします。しかし、はじめはいたずらに言っていると思ったりもしましたが、冬の弓張平の独特の雰囲気、子供達に、そう言わせていると理解した方が正解かもしれません。つまり、いくら雪に慣れている西川町の子供達とはいえ、1m~2m の積雪下で生活している子供達が、4m も積もる状況に立つと、いやがおうにも体が過剰に反応し、非日常の世界に踏み込んだような感じになってしまうということだと思のです。

つまり、ここは極地だということです。町内の子供達には、極地としてある月山山麓の冬に、是非とも触れさせたいと切に思います。



再び積雪について

新庄雪氷防災研究支所では志津地区で、積雪深とともに雪の重さも測っています。それによると2月現在で、1立方メートルの雪の重さは300~400Kgで、志津地区においてはおよそ3mの積雪で1t程度になるようです。*時期によってこの値はかなり違ってきます。

新雪が1m降ったとしても、最終的には10cm程に締まるので、5mの積雪になるには、およそ50m位の降雪が必要になる計算です。

最近経験したことですが、一日で50cm位の降雪が数日間続いたときですが、2.5m前後の積雪深が続くものの、なかなか3mに達しないことが解りました。降っても降っても3mにならないということは、

平年並みの4mに到達するということは、とっても大変なことだと実感したのでした。

雪を降水量に換算する場合、新雪の段階では1割程度であっても、最終的には雪が締まってくるので、3割程度になります。

何を伝えたいのかというと、2.5mを超える積雪がある地域というのは、質的に違う感覚というか、根本的に異なる世界だということなのです。

雪の積もり方というのは、私達が予測するほど単純ではなく、湿気も風も大きく影響し、何よりも理解しにくいのは、ある程度積もってしまうと、雪の自重作用が働いて、それまでのようには増えにくくなり、次第に締まっていくという現象です。

以前から新庄雪氷防災研究支所のデータと西川町のデータが、同じ志津地区なのに、かなり違う数字になっていることに、不思議に思っていたわけですが、これは、実際の数字と重量から導き出した数字の違いであると理解していました。ちなみに2/18現在の数字で比べてみると、西川町のデータは4.8mに対して、新庄のデータは3mとなっています。この違いは、新雪は、一時的に増えますが、最終的には3割程度に落ち着くということで、あくまで新庄のデータは、降水量もしくは重さとして雪を考えているのだろう、勝手に納得していたのでした。

念のために過日、支所の阿部治研究主任に電話でお話しを伺ったところ、とんでもない早合点で、支所のデータも西川町同様に、超音波方式で積雪深を計測しており、重量の計測とは違うことが解りました。

つまり、同じ志津地区でも、ポイントによって、これだけ数値が異なるということです。しかも、支所のポイントも志津の駐車場でそれほどに吹きさらしの所ではないとのこと。そんなちょっとした条件で、2m近くの差がでてしまうのです。

いずれの方法でも、3mを超える積雪というのは、人々が生活を営んでしいる所としては別世界の環境であることに違いないと思います。ましてや4mとか5mという世界は、とうてい他所の地域の人には理解できない自然環境なのです。

しかし、このユニークな自然環境で、活気ある地域社会として400年も続いているということは素直な驚きで、そこには深い神秘が隠されているような気がします。

是非、志津地区生誕400年祭に向けて、こうした気象についても改めて勉強してみましよう。

